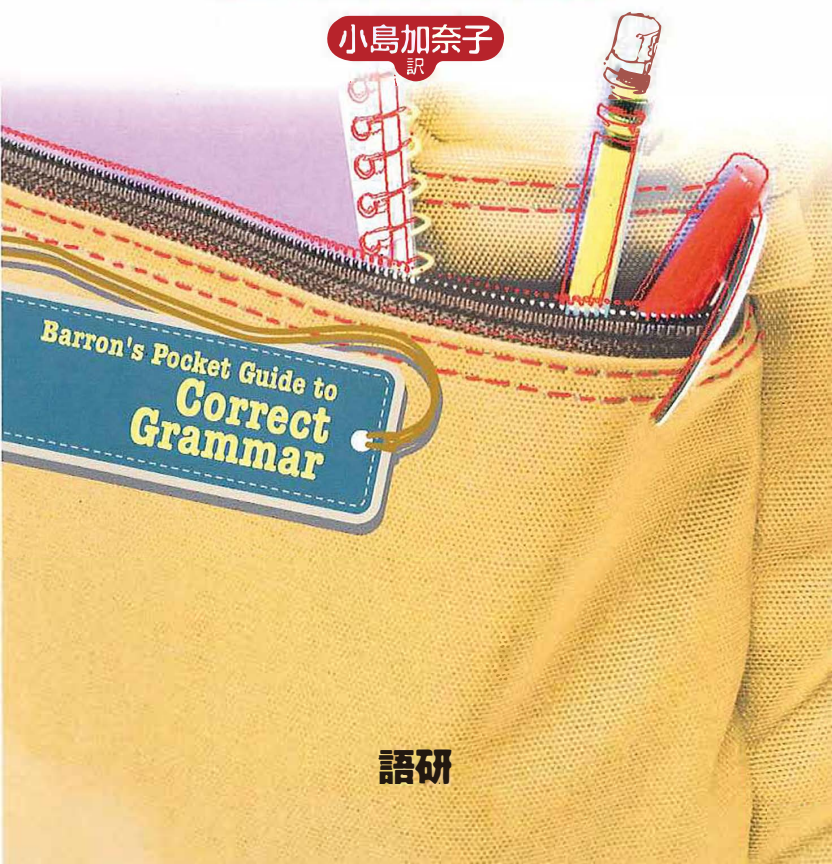


● 基本ルールで話せる・書ける ●

英文法 ポケットガイド

Benjamin W. Griffith+Vincent F. Hopper
Cedric Gale+Ronald C. Foote

小島加奈子
訳



Barron's Pocket Guide to
Correct
Grammar

語研

I

語彙 The Word

文で情報を伝えるには、基本的な「材料」である語彙について十分に理解していなければなりません。何かを考え、ことばで表現するには、その内容が単純であろうと複雑であろうと、さまざまな語彙が必要です。例えば、事物の名称を示す語、強く主張するための語、文を連結するための語、何かを描写するための語などです。思いどおりの文で表現するにはまず、さまざまな語彙の機能や性質に関する知識を身につける必要があります。文脈の中で語が果たす役割について知ること含まれます。

1.....The Noun

名詞

名詞は事物の名称を表します。人や場所、もの、概念、感情などを特定するわけです。

John (ジョン：人名)

Chicago (シカゴ：地名)

committee (委員会：集合名詞)

table (テーブル：普通名詞)

cyberspace (サイバー空間：抽象名詞)

hatred (憎しみ：抽象名詞)

baseball (野球：抽象名詞／野球用のボール：普通名詞)

❖名詞の特徴

名詞は「事物に名称を与える」という機能からだけではなく、語としての形や文中の位置からも認識できます。例えば、次のような点から文中の語を名詞として認識できます。

▶ the, my, a, thisなどの限定詞の後に続く。

a **truth** (真実)

his **jacket** (彼のジャケット)

this **information** (この情報)

▶ 動詞の前に置いて主語、後に置いて目的語となる。

His **moves** dazzled the **spectators**. (彼の動きが観客を驚かせた)

Faith moves **mountains**. (信念は山をも動かす)

▶前置詞の後に置いて前置詞の目的語となる。

before **winter** (冬が来る前に)

after **Christmas** (クリスマスの後で)

in his **adversity** (彼の逆境の中で)

▶名詞の多くは語尾に-s/-esを付けて複数形をつくる。

hamburger, hamburgers (ハンバーガー)

church, churches (教会)

debate, debates (討論集会)

▶名詞によっては、-'sか-'を付けて所有を表す。

the **boy's** bicycle (少年の自転車)

the **boys'** room (少年たちの部屋)

▶名詞によっては、特定の事物の名称や人の肩書きを表す場合に大文字で書き始める。

Wilson High School (ウィルソン高校：固有名詞)

Armando (アーマンド：人名)

America (アメリカ：地名)

September (9月：月の名称)

Secretary General (事務総長：肩書き)

▶名詞によっては、-nessや-tion, -ityなどの名詞特有の語尾を持つ。

reasonableness (合理性)

situation (状況)

adversity (逆境)

❖固有名詞と普通名詞

具体的な人物名や肩書き、地名などは通常は固有名詞として、常に大文字で書き始めます。名詞が人名や肩書き、地名などを表さない場合には大文字で書き始めません。以

下を比較してみましょう：

I will ask **Mother**. (母に聞いてみます)

Yesterday she became a **mother**. (昨日、彼女は母親になった)

I think that **Crescent City** is in Alberta. (クレセント・シティはアルバータ州にあると思います)

The city lies on a **crescent** in the river. (その市は河川内部の三日月状の土地にある)

He settled in the **West**. (彼は西部に住み着いた)

He drove **west** for 10 miles. (彼は西へ10マイル車で進んだ)

固有名詞は人名や大陸、国、省、州、郡、地域、曜日、月、祝祭日などの名称を表します。季節の名称は固有名詞ではありません。

Christmas (クリスマス)

December (12月)

Friday (金曜日)

Alberta (アルバータ州)

the Netherlands (オランダ)

Judge Hernandez (ヘルナンデス判事)

winter (冬)

❖ 単数形と複数形

ほとんどの名詞には単数形と複数形があります。通常は、複数形は単数形の語尾に-s/-esを付けます。

sigh, sighs (ため息)

fox, foxes (キツネ)

category, categories (カテゴリー)

calf, calves (子牛)

語尾が-yや-fで終わる名詞を複数形にする場合には注意が必要です。-yで終わる名詞を複数形にすると-ies, -fで終わる名詞を複数形にすると-vesという語尾になります。ただし、例外も少なくないので、必ず辞書で確認しましょう。

名詞によっては不規則な形の複数形をとるものもあります。

child, **children** (子ども)

goose, **geese** (ガチョウ)

sheep, **sheep** (ヒツジ：単複同形)

英語以外の言語から取り入れられた名詞は、本来の言語で使われている複数形をそのまま英語でも使用することがあります。

datum, **data** (データ)

crisis, **crises** (危機)

その他の外来語は、英語化された複数形、本来の言語で使われている複数形のどちらも用います。

appendix, appendixes/**appendices** (付録)

curriculum, curriculums/**curricula** (カリキュラム)

formula, formulas/**formulae** (公式)

単数形しかない名詞もあります。例えば, dust, courage, funはそれぞれmuch dust, more courage, less funとは言えても, *much dusts, *more courages, *less funsとは言えません (本文中の*は、標準アメリカ英語では正しくないと言われる表現に付けてあります)。こういった名詞は不可算名詞 (または質量名詞) と呼ばれます。much/moreや

little/lessは不可算名詞を修飾して「量」の多少を表します。peopleのような名詞の「数」の多少を表すにはmany/moreやfew/fewerを用います。

不可算名詞であっても、複数の種類があることを強調したい場合には複数形をとることがあります。

There are some new instant **coffees** on the market.

(いくつかの新しいインスタント・コーヒーが売られている)

Several **wheats** grow in Australia. (オーストラリアでは

いくつかの種類の小麦が育つ)

❖ 名詞の所有格

名詞を所有格にする場合、[s]や[z]の音で終わらない名詞には-'sを付けます。

the **boy's** room (少年の部屋)

the **children's** school (子どもたちの学校)

[s]や[z]の音で終わる名詞には-'だけを語尾に加えます。

the **boys'** room (少年たちの部屋)

Dickens' novel (ディケンズの小説)

[s]や[z]の音で終わる一音節の固有名詞の場合には-'sを付けます。

Keats's sonnets (キーツのソネット)

Santa Claus's reindeer (サンタ・クロースのトナカイ)

-yで終わる名詞を所有格にする場合、その名詞が単数の場合と複数の場合では、発音は同じですが綴りが異なります。

one **baby's** cry (ひとりの赤ちゃんの泣き声)

the **babies'** murmurings (赤ちゃんたちの小さな声)

「2つ以上の事物や人を表す名詞が～を共有している」という意味で所有格を用いる場合には、最後の名詞だけを所有格にします。

Jose, Fred and **Edward's** canoe (ホセ、フレッド、エドワードの〔共有している〕カヌー)

❖所有格と《of+名詞》

無生物は通常、何かを「所有する」ことはありません。前置詞ofと無生物の名詞を組み合わせた《of+名詞》は、所有というよりも、無生物である名詞の一部や状態・状況を表します。

the edge **of the chisel** (彫刻刀の端：一部)

piles **of coats** (コートの上：状態・状況)

しかし、長い歴史の中でこのルールにも例外が生じています。例えば「一日の仕事」という意味でa day's workと言いますし、「1ドルの価値」という意味でa dollar's worthという表現も可能です。ますます多くの無生物がアポストロフィを伴う所有格をとるようになっていきます。

the **razor's** edge (カミソリの刃)

the **book's** success (書籍の成功)

education's failure (教育の失敗)

❖名詞の機能

名詞にはさまざまな機能があります。

▶主語、目的語、動詞や準動詞の補語となる。

Being a recent **arrival** (準動詞beingの補語)

from Puerto Rico, **Margarita** (動詞wasの主語)

was proud that she could speak **Spanish** (動詞speak

の目的語)

as well as English.

- ▶ 前置詞の目的語となる。

Margarita, who came from **Puerto Rico**, (前置詞from
の目的語)

spoke excellent Spanish in her **home** (前置詞inの目的
語)

and good English at **school**. (前置詞atの目的語)

- ▶ 他の名詞の後に続けて、同格を表す修飾語句となる。

my brother **Charles** (私の兄であるチャールズ)

his problem, a damaged **ankle** (彼の抱える問題である足
首の損傷)

- ▶ 他の名詞の前に用いて、後に続く名詞を修飾する。

a **problem** child (問題児)

a **noun** clause (名詞節)

a **bottle** opener (栓抜き)

- ▶ 形容詞や動詞を修飾する。

The soldiers were **battle** weary. (兵士たちは戦いに疲れ
ていた：形容詞wearyを修飾)

They arrived **yesterday**. (彼らは昨日到着した：動詞
arrivedを修飾)

- ▶ 所有格で用いて、他の名詞の限定詞となる。

the **bride's** mother (花嫁の母)

2.....The Pronoun

代名詞

代名詞は文中で名詞の役割を果たすことが多いのですが、具体的な意味を持たないこともあります。anyone, something, somebodyのような不定代名詞は不特定の人や事物を指しているにすぎません。

他の名詞の代わりに用いる代名詞は、もとの名詞の意味をそっくり引き継ぎます。代名詞に取って代わられる名詞を「代名詞の先行詞」と呼びます。代名詞の先行詞は、通常は名詞と修飾語句ですが、文全体が先行詞になることもあります。

The dog lost **its** bone. (犬は自分の骨をなくした：
its=the dog's)

The man, **who** had his car stolen, was in shock. (その男性は車を盗まれ、ショックを受けた：who=the man)

I have written to my sister to invite **her** to the wedding. (結婚式に招待するために私は妹に手紙を書いた：her=my sister)

Do you want a small cone or a large **one**? (アイスクリームのコーンは小がいいですか、大がいいですか：
one=cone)

Chris tried to calm his wife's fears. He found **this** harder than he expected. (クリスは妻の不安な気持ちを落ち着かせようとしたが、それは思った以上に難しいことがわかった：this=tried to calm his wife's fears)

❖ 人称代名詞

人称代名詞は人，格，数，性（三人称のみ）の区別があります。

一人称（話し手または書き手）

格	単数	複数
主格	I (私は)	we (私たちは)
所有格	my, mine (私の, 私のもの)	our, ours (私たちの, 私たちのもの)
目的格	me (私に (を))	us (私たちに (を))

二人称（対する相手）

格	単数	複数
主格	you (あなたは)	you (あなたたちは)
所有格	your, yours (あなたの, あなたのもの)	your, yours (あなたたちの, あなたたちのもの)
目的格	you (あなたに (を))	you (あなたたちに (を))

三人称（話し手，書き手，聞き手以外の人，場所，事物）

格	単数			複数
	男性	女性	中性	
主格	he (彼は)	she (彼女は)	it (それは)	they (彼(女)らは, それらは)
所有格	his (彼の, 彼のもの)	her, hers (彼女の, 彼女のもの)	its (その)	their, theirs (彼(女)らの, それらの: 彼(女)らのもの, それらのもの)
目的格	him (彼に (を))	her (彼女に (を))	it (それに (を))	them (彼(女)らに (を), それらに (を))

❖ 関係代名詞

文の中に別の文を関係詞節として組み込む場合、反復して用いなくてはならない名詞の代わりに関係代名詞を用います。

The basketball player, **who** has all the moves, could not be stopped. (そのバスケットボール選手はどんな動きもでき、彼を止めることはできない：who=the basketball player)

The tools **that** he bought yesterday were specked with rust. (彼が昨日購入した工具はサビでシミが付いていた：that ... yesterdayはthe toolsについての補足説明)

関係代名詞のwho, whom, whoseは人について、whichは事物について、thatは人と事物の両方について述べるときに用います。関係代名詞が省略できる場合は、The tools (that) he bought yesterday were specked with rust.のように言うこともできます。

❖ 疑問代名詞

疑問代名詞のwho, whom, whose, what, whichは疑問文で用います。who, whom, whoseは人について、whatは事物について用います。whichは人についても、事物についても用いることができます。

Who was the chairman? (議長はだれだったのですか)

What was he carrying? (彼は何を運んでいたのですか)

Which of the passengers was hurt? (どちらの乗客が負傷したのですか)

❖ 指示代名詞

this, these, that, thoseなどの指示代名詞は、話し手／書き手からの近さや距離を表すことができます。通常、先行詞は他の節か文の中にありますが、特定の先行詞を持たないこともあります。

This is my father, and **those** are my children, Jenny and George. (こちらは私の父で、あちらにいるのは私の子どもたちのジェニーとジョージです：this=my father, those=Jenny and George)

Mark would climb trees at night. **This** disturbed his mother. (マークは夜に木登りをしたものでした。このことで彼の母親は気が気でない思いをしました：this=Mark's climbing trees at night)

Be gentle to **those** who stay angry. (怒りが収まらない人にはやさしくしてあげなさい：those=people staying angry)

❖ 不定代名詞

不定代名詞にはeach, all, either, anyone, somebody, everyone, many, severalなどがあります。いずれも先行詞は通常、あいまいなままか不特定です。

❖ 強意代名詞と再帰代名詞

-self/-selvesの語尾を持つ人称代名詞 (myself, ourselves, itselfなど) には2つの機能があります。まず、意味を強調する目的で、先行詞である名詞を反復して示します。

Mary **herself** was responsible. (メアリー自身に責任があ

った)

次に、動詞の目的語として、先行詞である主語に何らかの行為が及ぶことを示します。

I hurt **myself**. (私は自分自身を傷つけた：myself=Iだが、Iが主語であるのに対してmyselfは目的語)

myselfをmeの代わりに用いることはできません。*He is going to the hockey game with Michelle and myself.という言い方は誤りで、この場合にはmyselfではなくmeを用いるべきです。

❖代名詞の格

文中の他の語との関係で名詞や代名詞の語形が変化することを「格変化」といいます。英語では、名詞の格変化は所有格しかありません。しかし、人称代名詞と、whoおよびwhoeverという2つの関係代名詞には主格、目的格、所有格があります。

❖主格

I, we, you, it, he, she, they, who, whoeverが代名詞の主格です。

▶ 主語を表す。

Jason and **I** are going to the pizza parlor. (ジェイソンと私はピザのお店に行くところです)

I don't know **who** stole the luggage. (だれが手荷物を盗んだのか私にはわかりません)

Give it to **whoever** comes. (だれでもいいから来た人にそれをあげてください：前置詞toの目的語はwhoeverではなく、whoever comesという節全体です)

▶ 主語を繰り返す。

Three members of our team gave presentation—
Glynis, Paul, and **I**. (私たちのチームの3人がプレゼンテ
ーションをした——グリニス, ポール, そして私の3人で
す)

▶ 動詞が省略されている文で主語となる。

He is more articulate than **she**. (彼は彼女以上にはっき
りものを言う)

He plays as well as **I**. (彼の演奏は私に負けない：気取っ
た感じがするために, He plays as well as I do.のほうを
好む人もいる)

▶ be動詞の後に用いる。(beの後に主格を持ってくるのは不自
然だという意見もあり, 代わりに目的格の代名詞を使用すること
もある)

It was **they** who found the dog. (その犬を見つけたのは
彼らでした：=It was **them** who found the dog.)

That must be **she**. (それは彼女に違いありません：=That
must be **her**.)

I shouldn't care to be **he**. (私は彼でありたいとは思いま
せん：=I shouldn't care to be **him**.)

❖ 目的格

me, us, you, her/him/it, them, who(m), whomever
が代名詞の目的格です。

▶ 動詞, 準動詞, 前置詞の目的語となる。

Shoving **me** before him, he forced **me** down the alley.
(自分の前に私を押しやると, 彼は無理矢理私に小道を歩
かせた)

My brother came between Carlos and **me**. (兄が私とカルロスの仲を裂いた)

Whom were they talking about? (彼らはだれのことを話していたのですか：口語ではWho were they talking about?も可)

Give it to **whomever** he sends to our office. (彼が当社に使いに送る人ならだれでもいいので、これを渡してください：口語ではwhoeverも可)

▶ 目的語を繰り返す。

The police ticketed three members of our group, Garcia, McEwan, and **me**. (警察は私たちのグループの3人に違反切符を切った。ガルシア、マキューアン、そして私だ)

A lot of **us** passengers were hurt in the accident. (私たち乗客の多くがその事故で負傷した)

▶ 動詞が省略されている文で目的語を表す。

Mr. Anderson did not recommend him as highly as **me**. (アンダーソン氏は、彼を私ほどに高く評価して推薦しなかった：... as he did meも可)

▶ 不定詞の前に置いて、不定詞の意味上の主語を表す。

We wanted **him** to win. (私たちは彼に勝ってもらいたかった)

The plan was for **him** to slide down the rope. (彼がロープを滑り降りる計画になっていた)

❖ 所有格

代名詞にはmy, our, your, her/his/its, their, whose という所有格と, mine, ours, yours, hers/his/its,

theirs, whoseという独立所有格があります。

❖ 所有格の機能

所有格は次のような働きを持ちます。

▶ 名詞の前に置いて限定詞の役割を果たし、所有、関係、行動の主、事物の分類を表す。

Whose car was stolen? (だれの車が盗まれたのですか)

the **bureau's** lawyers (事務局所属の弁護団：事務局が弁護団を所有しているという意味ではなく、事務局と弁護団に関係性があるということ)

▶ 動名詞の前に置いて、動名詞の意味上の主語を表す。

His leaving at dawn upset his mother. (彼が夜明けに出ていってしまったので、母親はびっくりした)

He slipped away without **anybody's** noticing him. (彼はだれにも気付かれることなく立ち去った)

❖ 独立所有格の機能

独立所有格は名詞相当語句として主語、目的語、補語になります。

His was a fascinating personality. (彼の人柄はとても興味をそそるものでした：主語)

He's a friend of Mother's and **mine**. (彼は母と私の友人です：前置詞ofの目的語)

I wonder **whose** this is. (これはだれのだろうか：補語)

3.....The Verb

動詞

動詞は動作や状態を表し、次の2つの機能を持ちます。

- ▶ 主語を伴い、文を完結させる。(定形動詞)

The news **infuriating** him. (その知らせに彼は激怒した)

- ▶ 名詞相当語句や修飾語としての機能を果たす。(不定詞、現在分詞、過去分詞、動名詞の形をとり、非定形動詞と呼ばれる)

the **infuriating** news (人を激怒させるような知らせ)

❖ 定形動詞の特徴

ほとんどの定形動詞は、語尾に-ed/-dを付けて「過去」を表すことができます。ただし、一部の定形動詞はこのように規則的な語尾変化をしないので、注意しましょう。

cough, coughed (せきをする)

celebrate, celebrated (祝う)

- ▶ 主語が三人称単数で時制が「現在」の場合、ほとんどすべての定形動詞の語尾に-sが付く。

cough, he coughs (せきをする)

celebrate, she celebrates (祝う)

- ▶ can, must, have, beのような助動詞とともに動詞句を形成する。

can be **suffering** (苦しんでいることもありうる)

will have **gone** (行ってしまっているだろう)

must **eat** (食べなければならない)

- ▶ 通常は主語の後に続く。

He **coughs**. (彼はせきをする)

The letter **disappointed** him. (その手紙に彼はがっかりした)

They will **have gone**. (彼らは行ってしまっているだろう)

▶ 疑問文の場合、主語をはさむ形で用いる。

Is he coughing? (彼はせきをしていますか)

Did they celebrate? (彼らは祝いましたか)

▶ 次のような組み合わせで用いることができる。

1. 法助動詞：will, would, can, mustなど+原形
2. 完了形：have+過去分詞（語尾は-en/-ed）
3. 進行形：be動詞+動詞の-ing形
4. 受動態：be動詞+過去分詞（語尾は-en/-ed）
5. 本動詞：watch, tolerateなど

❖法

動詞を直説法、命令法、仮定法で用いて、話し手や書き手のさまざまな意図を表すことができます。

▶ 直説法は断定する場合や質問する目的で用いる。

A police car **slid** down the street. (パトカーが通りを疾走していった)

Where **are you going?** (どこへ行くのですか)

▶ 命令法は命令、指示、または要求を表す。

Go to the store and buy some food. (その店に行って食べ物を買ってきなさい：命令)

Turn right at the next traffic light. (次の信号のところで右折しなさい：指示)

Please **answer** my letter. (私の手紙に返事をください：要求)

▶ 仮定法は緊急な用件，正規の手続き，可能性，非現実などを表す。仮定法では，本来は現在や過去の意味を表さない文脈で動詞の現在形や過去形を用いる。

I demand that he **see** me immediately. (彼がすぐに私と面会するよう要求いたします：要求)

I move that the motion **be tabled**. (その動議が提案されるよう申し立てます：正規の手続き)

It was important that she **love** me. (彼女が私を愛しているということが重要だったのです：過去における切迫した感情や状況)

If she were to go, there might **be** trouble. (彼女が行くことになれば，困った事態になるかもしれない：将来における可能性)

If he were talented, he could **make** money. (彼にもし才能があれば，お金を稼ぐことができるでしょうに：現実とは異なる状況)

❖ 他動詞と自動詞

動詞には他動詞と自動詞があります。他動詞は，意味を完結するために目的語を必要とします。

The hammer **strikes** the valve. (ハンマーがバルブを打ちつける)

Angela **read** the newspaper. (アンジェラはその新聞を読んだ)

John **has** a horse. (ジョンは馬を飼っている)

自動詞は目的語がなくても意味が完結します。

The clock **strikes**. (時計が針を打つ)

He **walks** down the street every evening. (彼は毎晩そ

の通りを歩く)

The bird **is** on the fence. (その鳥はフェンスにとまっている)

多くの動詞は他動詞と自動詞の両方の働きを持ちます。

The hammer **strikes** the valve. (ハンマーがバルブを打ちつける：他動詞)

The clock **strikes**. (時計が針を打つ：自動詞)

He **breathes** the mountain air. (彼は山の空気を吸います：他動詞)

He **breathes**. (彼は息をする、彼は生きている：自動詞)

自動詞のうち、主語と述語の名詞、代名詞、形容詞を等しいものとして結ぶ働きを持つ動詞を「連結動詞」と呼びます。もっともよく使われる連結動詞はbe動詞ですが、become, seem, smell, look, grow, feel, sound, get, taste, appearなどもよく使われます。

Sean **is** the president. (シヨーンは社長です)

The bird **is** a bluejay. (その鳥はアオカケスです)

❖ 受動態

《主語＋他動詞＋目的語》を用いた文（能動態）の動詞の形を変え、他動詞の目的語を主語にして受動態の文に変換することができます。

The Cardinals **won** the 2006 World Series. (カーディナルスは2006年のワールドシリーズで勝利を収めた：能動態)

The 2006 World Series **was won** by the Cardinals.
(2006年のワールドシリーズはカーディナルスによって勝利を収められた：受動態)

能動態を受動態に変換する場合、「行為者」を表す能動態

の主語は、前置詞byを付けた形で受動態の文に含めることができます。受動態は、能動態の文の主語ではなく目的語に注意を向けたい場合、または強調したい場合に用います。

また、動作の主がわからない場合や、あえて触れる必要がない場合にも受動態を用いることがあります。

Our office **was renovated** last year. (当オフィスは昨年改装されました)

Our car **was stolen** yesterday. (私たちの車が昨日盗まれた)

❖現在時制と過去時制

本動詞は基本的に現在時制か過去時制のどちらかの形を取ります。さらに、完了時制や進行形といった時制もあります。

▶ 現在時制は「いま現在」という意味を必ず含む。

This apple **tastes** good. (このリンゴはおいしい：現在の事実)

Apples **taste** good. (リンゴはおいしい：一般的事実)

In *Hamlet*, the opening scene **takes** place at night.
(『ハムレット』では、冒頭のシーンは夜となっている：
現在にも通用する事実)

Rita **goes** to Mexico City tomorrow. (リタは明日メキシコシティに行く：すでに決定している予定)

He **uses** lemon in his tea. (彼は紅茶にレモンを入れる：習慣)

▶ 過去時制は、過去の出来事や過去に習慣的に行っていた行為を表す。時を表す語句との併用によって「過去」のニュアンスをさらに強めることもできる。

I **went** down the street yesterday. (私は昨日通りを歩いた：過去に完結した出来事)

Whenever the mayor **went** down the street, the people cheered. (市長が通りを行くたびに人々が喝采を送った：過去の習慣)

❖ 法助動詞

法助動詞はさまざまな思考や感情を表します。

You **can** put your shirt on now. (もうシャツを着てもかまいません：許可)

You **may** come in. (お入りください：許可)

I **can** read the sign language. (私は手話を読むことができる：能力)

She **could** open the door. (彼女ならドアを開けることができる：能力)

He **must** see her today. (彼は今日彼女に会わねばならない：義務)

He **had to** go to Nairobi. (彼はナイロビに行かねばならなかった：不可避)

He **must** have seen her. (彼は彼女に会ったに違いない：結論)

Cats **will** sleep for hours. (ネコは何時間も眠ることがある：真実)

❖ 未来

法助動詞や、現在時制と過去時制、時を表す副詞句を使って未来を表現できます。

He **is going to** lose his mind. (彼は頭がおかしくなるだ

ろう)

He **is about to** lose his mind. (彼は頭がおかしくなりかけている)

I **begin** work tomorrow. (明日仕事を始めます)

It's time you **went** to bed. (もう寝る時間ですよ)

❖willとshall

単純未来を表す場合、フォーマルな表現では一人称に shall を用い、will と won't は二人称と三人称に用いるのが正しいとされてきました。

I/We **shall** [**shall** not] go. (私 (たち) は行く [行かない] でしょう)

You **will** [**won't**] go. (あなたは行く [行かない] でしょう)

He/She/They **will** [**won't**] go. (彼/彼女/彼らは行く [行かない] でしょう)

近年では人称にかかわらず、またフォーマルな書き言葉でも will/won't が使われます。しかし、慣用表現では今も shall が使われます。

Shall we dance? (踊りましょうか)

Shall we go? (行きましょうか)

約束や決意を示す場合、一人称でも will を用います。また、命令や決意を示す場合、二人称や三人称でも shall を用いることができます。

I/We **will** go. (私 (たち) は行くでしょう)

You/He/She/It/They **shall** go. (あなた/彼/彼女/それ/彼らは行くべきです)

❖完了時制

完了時制は、ある時点に生じた行動や状態が別の時点にも関連していることを表します。例えばI ran out of gas. (ガソリンが切れてしまった) という文は、単にその状態が過去に生じたという事実を表現しているにすぎません。一方、I've run out of gas. (ガソリンが切れてしまっている) という完了時制の文なら、過去に生じたガソリン切れという状態が今も続いていることを表します。

I **have waited** for you. (あなたのことを待っていました：現在も状態が続いている)

Luis **has visited** San Juan several times. (ルイスは何度もサン・ファンに行ったことがある：経験)

I **had waited** for you. (あなたのことを待っていたのでした：過去に生じた状態がその後完了した)

Mary **had been** out in the canoe all morning when she suddenly fell into the lake. (午前中ずっとカヌーに乗っていたメアリーは突然湖に転落した：過去に生じた2つの出来事の時間的な隔たりを明示する)

By sundown he should **have finished** the job. (彼は日没までにその仕事を終わらすべきだったが：過去の事実と反する仮定)

By sundown he will **have finished** the job. (日没までに彼はその仕事を終えるでしょう：未来の時点までに完了しているはずの事柄)

❖進行形

進行形は、行為や状態が継続していることを表します。動詞そのものに継続の意味が含まれている場合は進行形に

する必要はありません。例えばI live in Boston.という文は「現在もボストンで暮らしている」という意味になりますから、I am living in Boston.と進行形にする必要はないのです。完了時制と進行形を組み合わせることで、過去に生じた行動や状態が継続していることを表現できます。

He **worked** in his cellar. (彼は地下貯蔵庫で作業をした)

He **was working** in his cellar. (彼は地下貯蔵庫で作業をしていた)

He **has been working** in his cellar. (彼は〔今も〕地下貯蔵庫で作業をしている)

進行形の文はwork (作業する) という動作が「継続中である」ことを強調しています。進行形は「継続」を表す副詞によって意味を補強することが多くあります。

He **is** always **running** to his mother. (彼はいつも母親に助けを求めてばかりいる)

He must **have been painting** the house for days now.
(彼はもう何日も家にペンキを塗り続けているに違いない)

I've **been washing** the dog. (私はずっと犬を洗っているのです)

4.....The Adjective and the Adverb

形容詞と副詞

形容詞と副詞は事物や動作、行動の顕著な特徴を表します。

fast horse (速い馬)

He drove **fast**. (彼は高スピードで運転した)

respectable conduct (立派な行為)

He behaved **respectably**. (彼の行為は立派なものだった)

❖形容詞と副詞の区別

▶ 形容詞と副詞は形によって識別できる場合もある。ほとんどの副詞は形容詞の語尾に-lyを付け加えたものだが、形容詞、副詞がともに-lyで終わる場合もある (cowardlyやhourlyなど)。

	形容詞	副詞
theory (理論)	theoretical (理論の)	theoretically (理論上は)
differ (異なる)	different (異なった)	differently (異なって)
honor (名誉)	honorable (名誉となる)	honorably (立派に)
coward (臆病者)	cowardly (臆病な)	cowardly (臆病に)
hour (時間)	hourly (一時間の)	hourly (一時間ごとに)
collect (集める)	collective (集まった)	collectively (集合的に)
back (背部)	backward (後方の)	backward (後方へ)
shore (岸)		ashore (岸へ)

強意の副詞veryで修飾することのできない形容詞があることに注意しましょう。例えば*He was very unique.という文は誤りです。uniqueという形容詞は「独特の、類のない」という意味であり、このような形容詞には「度合い」が存在しないからです。

❖冠詞

形容詞の働きをして、もっとも頻繁に使用されるのは冠詞であるa, an, theです。aとanは不特定のものを指す「不定冠詞」です。theは特定のものを指す「定冠詞」です。

子音で始まる単数名詞の前に付けるのがaです。母音で始まる単数名詞の前に付けるのはanです。aを用いるかanを用いるかを決めるのは文字そのものではなく、発音であることに注意しましょう。universityはuで始まりますが、このuは母音の発音ではありませんから、**a** universityとなります。同様に、NBAは「エヌ・ビー・エー」と発音するため、Nで始まっても**an** NBA officialのようにanを用います。

❖形容詞の働き

形容詞と副詞は他の語句を修飾するという点では共通ですが、機能はかなり異なります。形容詞は名詞を修飾するほか、be, seem, feelといった連結動詞の補語となります。

I am **happy** that he feels good. (彼がよい気分であることをうれしく思います)

You seem **sad**. (悲しそうですね：sadlyは不可)

I feel **bad** about your illness. (ご病気になられてたいへんですね：badlyは不可)

❖ 副詞の働き

副詞は動詞を修飾したり，修飾語句そのものを修飾します。

He spoke to her **quietly**. (彼は静かに彼女に話しかけた：動詞spokeを修飾)

She sang **extremely** well. (彼女はとてもうまく歌った：副詞wellを修飾)

❖ 形容詞と副詞の比較

形容詞と副詞には原級，比較級，最上級があります。原級は比較変化をしていない基本形 (small, beautiful, rich, loudlyなど) です。

ひとつの音節から成る形容詞は，原級の語尾に-erを付けて比較級を作り，-estを付けて最上級を作ります。例えばsmall, smaller, smallest ; rich, richer, richestのようになります。

2つ以上の音節から成る形容詞と副詞は，ほとんどの場合原級の前にmoreを加えて比較級を作り，mostを加えて最上級を作ります。例えばmore beautiful, most beautiful ; more loudly, most loudlyのようになります。

次のような形容詞，副詞にはこの規則が当てはまりません。

原級	比較級	最上級
happy (幸せな)	happier	happiest
bad (悪い)	worse	worst
ill (病気の)	worse	worst
good (よい)	better	best
well (健康な)	better	best

❖形容詞と副詞の比較級、最上級の働き

2つの事物を比較して表現するのが比較級です。比較の対象となる事物は文中ではっきりと述べることが多いものの、必ずしもそうとは限りません。

She runs **faster** than her coach. (彼女は自分のコーチよりも速く走る)

I've tasted **sweeter** raspberries than these. (私はこれらよりもっと甘いラズベリーを食べたことがある)

After that restful night, he was **more relaxed** when we came to see him. (安らかな晩を過ごした後だったので、私たちが訪れたときの彼はずっとリラックスしていた：リラックスしていた状態2つを明確に比べていない)

最上級は3つ以上の事物を比較する場合に用います。

She is **the fastest** reader in her class. (彼女はクラスの中でいちばん読むのが速い)

The outermost island was concealed by the approaching storm. (もっとも外れた場所に位置するその島は、近づいてくる嵐によって見えなくなっていた)

She shouted **the most loudly** of them all. (彼らの中でも彼女がいちばん大声で叫んだ)

副詞の最上級の代わりに形容詞の最上級を用いることもあります。

She shouted **the loudest** of them all. (彼らの中でも彼女がいちばん大声で叫んだ)

❖形容詞と副詞の混同

fast, slow, very, lateなどは形容詞としても副詞としても用います。

It was a **fast** train. (速い電車だった：形容詞)

The clock was **fast**. (時計は進んでいた：形容詞)

The horse ran **fast**. (その馬は疾走した：副詞)

good, well, bad, badlyなどは混同しやすいものです。

He was a **good** man. (彼は善良な男だった：形容詞)

I feel **good**. (私は元気です：形容詞)

wellは「健康な」という意味の形容詞としては、上記例文のgoodと置き換えることができますが、副詞としては「申し分なく」という意味です。

He played **well**. (彼はうまく演奏した：副詞)

He was **well** aware of his good looks. (自分が美形であることを彼は重々承知していた：副詞)

badlyという副詞は形容詞のbadと間違えやすいものです。

John feels **bad**. (ジョンは気分が悪い：このbadをbadlyで言い換えることはできない)

You look **bad**. (ひどい服装ですね：このbadをbadlyで言い換えることはできない)

He was **badly** mistaken. (彼はひどく誤解していた)

形容詞がis, feel, look, seem, become, smellなどの連結動詞に続く場合、その形容詞は動詞の補語となります。このような形容詞を「叙述形容詞」といいます。

The water is [seems/feels/looks/is getting/is becoming] **hot**.

I feel [look/am] **fine** [ill/sick/good/bad].

You look **beautiful**.

5.....The Verbal

準動詞

動詞から生まれ、名詞や修飾語として用いる語を準動詞といいます。例えばswimming（水泳）という語はswim（泳ぐ）という動詞から作られた動名詞で、文の中で名詞として機能します。

Swimming is fun.（水泳は楽しい）

❖不定詞

不定詞は通常《to+原形動詞》の形で用いて、多くの場合、文の主語として機能します。

To live happily is not so hard.（幸せに暮らすことは、そう難しいことではない）

To be living today is not so bad.（この時代を生きているということは、そう悪いものではない）

不定詞のtoは省略されることもあります。

Ask me **to do** it.（私にそうするよう言ってください）

Let me **do** it.（私にそうさせてください）

He was made **to confess**.（彼は自供させられた）

They made him **confess**.（彼らは彼に自供させた）

❖現在分詞

現在分詞は動詞の語尾に-ingを付けます。次の文では、現在分詞がtheyという代名詞を修飾しています。

Arriving early, they smiled with embarrassment. (早く到着してしまい、彼らは照れ笑いした) ☞ arrivingとsmiledはともに過去の動作。

Arriving tomorrow, they will be met at the airport. (明日の到着時に彼らは空港で出迎えを受けるだろう) ☞ arrivingとwill be metはともに未来の動作。

完了形の現在分詞もあり、《having + 過去分詞》を用います。

Having arrived early, they decided to wait for their host. (早く到着してしまったので、彼らは主催者を待つことにした) ☞ 完了形の現在分詞は、過去の動作(decided) より前の動作(「過去の過去」)を表す。

❖ 動名詞

動名詞は名詞として機能する現在分詞のことで、動作や状態を「～すること、～していること」という名詞として表現します。不定詞と同様に、修飾語や補語を持つことができます。

Reading improves the mind. (読書は知性を磨く)

Eating too much is bad for you. (食べすぎは健康によくない)

Being gloomy is habitual to her. (ふさぎ込むことは彼女にはよくある)

Shooting basketballs was his favorite pastime. (バスケットボールをシュートすることが彼のお気に入りの気晴らしだった)

❖ 過去分詞

過去分詞は一般に、動詞の語尾に-ed/-dを付けます。過去分詞は過去、現在、未来を表現することができます。

Thus **deceived**, he will be outraged. (こんなふうにだまされたら、彼は激怒するだろう) ⇨ deceivedとwill be outragedはともに未来の動作。

Baffled by your attitude, I cannot help you. (あなたの行動には困惑しているので、あなたを助けてあげることはいできない) ⇨ baffledとhelpはともに現在の動作。

Baffled by your attitude, I could not help you. (あなたの行動には困惑したので、あなたを助けてあげることはいできなかった) ⇨ baffledとhelpはともに過去の動作。

過去分詞は、完了形でも進行形でも用います。

Having been discovered, the thief confessed. (見つかってしまったので、泥棒は自供した)

Being watched, he only pretended to be indifferent. (じっと見られていたので、彼は無関心を装うしかなかった)

❖ 準動詞の働き

準動詞には動詞の働きはありません。その代わりに、名詞相当語句や修飾語として働きます。通常は独自の修飾語や補語、目的語を持ちます。

名詞相当語句として機能する現在分詞を動名詞と呼びます。名詞相当語句として機能する不定詞はあくまで不定詞です。

▶ 名詞相当語句となる。

Being watched made him nervous. (じっと見られて彼

は緊張した：動名詞)

To be watched made him nervous. (じっと見られて彼

は緊張した：不定詞)

He was praised for his **typing**. (彼はタイプの腕前をほめ

られた：動名詞)

He urgently desired **to confess**. (彼はすぐにでも打ち明

けてしまいたかった：不定詞)

▶ 名詞の修飾語となる。

His desire **to confess** is urgent. (打ち明けてしまいたい

という彼の願望はせっぱ詰まったものだ：desireを修飾)

The **incriminating** documents could not be found. (有

罪を示すような書類は見つからなかった：documentsを修飾)

The statement **typed** earlier that morning has been

misaid. (あの朝早くにタイプされた声明は置き忘れられている：statementを修飾)

▶ 動詞の修飾語となる。

He went to the mountains **to meditate**. (彼は山に瞑想

しに行った：wentを修飾)

He scored his 1,000th point **to lead** the league. (彼は

リーグ一位となる1,000得点目を記録した：scoredを修飾)

▶ 形容詞の修飾語となる。

He is anxious **to cooperate**. (彼はぜひとも協力したがっている：anxiousを修飾)

The man, eager **to see** what was going on, looked

inside. (何が起きているかどうしても知りたかったその男は中をのぞいた：eagerを修飾)

6.....Prepositions and Conjunctions

前置詞と接続詞

文の構成要素を結び付ける働きをするのが前置詞と接続詞です。前置詞と接続詞の果たす働きはそれぞれ異なるので、注意して区別する必要があります。

❖前置詞と従位接続詞の区別

前置詞と従位接続詞は、後に続く語句から区別できます。また、従位接続詞は限られた数しかありません。

▶前置詞の後には名詞相当語句（名詞、代名詞、動名詞句、名詞節）が続く。

because of the bad weather（悪天候のために：the bad weatherが前置詞because ofの目的語）

before leaving home（家を出る前に：leaving homeが前置詞beforeの目的語）

after what he did（彼がしたことの後で：what he didが前置詞afterの目的語）

▶従位接続詞の後には、主語と動詞を持つ節が続く。

because the weather was bad（天候が悪かったので：becauseは従属節を導く従位接続詞）

before he left home（彼が家を出る前に：beforeは従属節を導く従位接続詞）

▶before, after, since, as, untilは前置詞としても従位接続詞としても用いる。後に続く語句によって前置詞か従位接続詞かが決まる。

since this morning (けさから：前置詞)

since you went away (あなたが去って以来：従位接続詞)

▶ if, when, while, althoughなどは従位接続詞である。後に続く節の《主語+be動詞》を省略することができるため、前置詞に思えることがあるが、名詞そのものを直後に用いることはできない(*when dinner) ので接続詞と考える。

when you were mopping the floor (あなたが床をモップで掃除していたときに：接続詞)

when mopping the floor (床をモップで掃除していたときに：接続詞)

if it is at all possible (可能であれば：接続詞)

if at all possible (可能であれば：接続詞)

although he was very angry (彼はとても腹を立てていたが：接続詞)

although very angry (とても腹を立てていたが：接続詞)

ほとんどの前置詞と従位接続詞は機能がはっきり区別されるので、混同することはないでしょう。以下のリストは代表的な前置詞と従位接続詞です。

前置詞	従位接続詞
in	if
by	why
for	how
beneath	although
because of	because
in spite of	inasmuch as
considering	provided that
aboard	where
except	that
than	than
as	as

▶ like (～のように) は標準的なアメリカ英語では前置詞であり、接続詞として用いるのは標準的な語法ではない。

Like me, Hans enjoyed soccer. (私のようにハンスもサッカーを楽しんだ：前置詞—標準的)

As I was saying, it's going to rain. (私が言っていたように、雨が降りそうです：接続詞—標準的)

*Like I was saying, it's going to rain. (同：接続詞—非標準的)

❖ 等位接続詞

重要度の等しい文要素を結び付けるのに使われるのが等位接続詞で、and, but, or, nor, for, yetがあります。

bread **and** butter (バター付きパン：語と語)

into the oven **or** over the fire (オーブンの中や火の上
に：句と句)

He wanted to learn, **but** he hated to study. (彼は学びた

かったが、勉強はきらいだった：独立節と独立節)

Matilda came in after I arrived **but** before dinner was served. (マチルダがやってきたのは私の後だったが、夕食が出される前だった：従属節と従属節)

等位接続詞は、文を導く効果をねらって文頭で用いることもあります。

He said he would do it. **And** he did. (彼はそうすると言った。そして、彼はそうした)

She swore that she told the truth. **Yet** she lied. (彼女は真実を語ると誓った。しかし、彼女はうそをついた)

❖ 相関接続詞

重要度の等しい文要素を結び付ける目的で他の語とペアで用いるものを「相関接続詞」と呼びます。both *A* and *B* (AもBも), either *A* or *B* (AかBのどちらか), neither *A* nor *B* (AでもなくBでもない), not only *A* but also *B* (AだけでなくBも) などです。

Either you go now **or** you stay here forever. (今行くか、一生ここに留まるかのどちらかです)

The team was **not only** weak on offense **but also** inept on defense. (そのチームは攻撃が弱いだけでなく、守備についても技量に欠けていた)

7Sentence Connectors

文接続語

文接続語は節や文を連結させる働きを持ちます。これらにはobviously, naturally, unfortunatelyのように副詞としても用いるものもあることから、「接続副詞」と呼ぶこともあります。もっともよく使われる文接続語にはtherefore, however, consequently, thus, then, in fact, moreover, nevertheless, so, in addition, meanwhileがあります。文接続語が独立節をつなぐ場合にはセミコロン(;)で区切ります。独立した文と文をつなぐ場合にはピリオド(.)で区切ります。

We watched his folly develop; **in fact**, we nurtured it.

(私たちは彼の愚かな行為がどんどんひどくなるのを目の当たりにした；実際のところ、私たちがそれを助長したのだ)

Joe Louis was a successful boxer. **However**, he did not emerge from his great career a rich man. (ジョー・ルイスは成功を取めたボクサーだった。しかしながら、彼は偉大なキャリアを通じて富を築くことはなかった)

等位接続詞と違い、2番目の文の途中で用いることのできる文接続語もあります。

The coach was not pleased by his skating technique. She was delighted, **however**, by his self-control and poise.

(コーチは彼のスケート技術には満足しなかった。しかしながら、彼の自制心や落ち着いた様子には感心していた)

8.....The Interjection

間投詞

間投詞は「文中に投げ入れられた」という意味が示すように、文の他の部分とは文法的関係がまったくありません。yes, no, oh, ah, well, helloなどが間投詞の仲間です。間投詞は頻繁に使われますが、文の正規の構成要素というわけではありませんから、前後に句読点を付けて他と区別します。

Oh, I didn't see you. (ああ、あなたが目に入りませんでした)

Yes, I'll do it. (ええ、私がやりましょう)

I waited, **alas**, too long. (やれやれ、あまりにも長い間待ちすぎた)

No! You can't mean it. (まさか！ 本気ではないですよ)